

探訪記

下大野崎崎、八幡山、下城を巡るの記

時日 三月八日(土曜)午後二時より
集合 在何大橋(南表)
参加 高木、高野、佐藤、加藤、河野、古田、羽柴、小野の会合(八)

足利孝准若鶴城高平(八)十名

先ず下大野崎の谷を歩くと豊日阿彌社に参拜しなげ神殿に掲げられている垂形の大木(非指連歌の歌歌が目をひく。この社殿のうしろが石櫃か祭歌の穴という。ここから蛇窟にかけての堤防や道路による変り方はばばしい。且ての蛇窟橋の淵や入る姿と古い地図に照して求まる。変へ左まゝである。

地所では先ず山台庵に立寄る。ここは佐伯四郎三番の住所、御寺堂は十二西観世音といふことだが戸帳の中ではつきり詳しぬ。御詠歌が縁の上にかりついで。

静かなる我がみなもと、祥師峰寺

うかふこころはコリコリはや舟

この庵の上には墓地がある。元禄時代の御寺の墓穴敷墓の外墓むし左古い墓が立ち並んでいるが、再墓他(堤の上)に改葬したものが付つけたりこゝろがたりしな墓が多い。丘の端に立つと番匠川(坂田川)下流から佐伯市街一帯が一望され、すばらしいところである。

一行は自転車と違つて川原部(坂田)道へ走る。堅田川の改修は今の山岸(佐伯)河段が盛みられているが、この左岸は既に完成、かなり高い堤防がついていてある。

川原村(坂田)の道も通つたが、格別なものもない。田園道は一直線に私共と八幡山の裾に導く。

八幡社の急な高い石段を登つたら、拜殿に足用泉先生が待たうけて、熱いお茶とお菓子を下さり下さり、八幡社の由来、歴史に關する資料を示しつゝお茶として下さる。高保の碑立てられた馬居、天保寺向進の拜殿などより、私は今

も毎月欠かさず月次祭を守りつづけていられる先生、御奉仕の姿をしましなと見つらるゝのであり、弘仁七年八月十五日(鎌倉)云々の棟札を拜見し、柏江の遠山神社、石井の比叟宗神社、社名のいわれを伺つたり、世々下安兵衛といふ宮大工のことなど、次から次へと話のつきない。

私共は足利先生に心から謝意をこめて、社殿のうしろ八幡山の古、岩跡を左づねる。頂上をめぐらるゝに樹林の中はそれと判じられる。切落し(たどり)の跡が見られる。樹令二百年位かと思われ、椎の老樹を交へての社叢は昔の堂である。

樹林を歩いて第一の空堀を渡り、尾根を歩いて歩くと、すべて「史蹟」四十一号に岩田会館が發表し、山から下りて一行は下城(田淵)の山を引越して立山より、うしろ下城(田淵)から登坂して左、生土(土器)を見て戻く。高さが三、四程ほい、殆んど完形のこの土器は古代人が焚火で用いたものであつたか半ば思ふついで。

出谷先生は私共と下城(田淵)に安帯(下)して下り、教録所址や住居跡など市社と取る。この下城(田淵)は南に向つ左のゆるやかな傾斜地で堅田平野から遠く広がり、寝場が茶やしてはほるかに日向境にそびえる場懸山まで正面に望まれ、私は佐伯第二等の住居地と見、古代人がこゝに住つたもう一つと云ふところである。私達は中山は田淵を通り二つの小さな昔のトンネルを通つて久野(津島)に出る。この道も歴史をもつ時、流石の中に今も法をうける。

時計は五時をまわり、少々疲れた。そこで佐伯崎公園に立寄ることは止して解散した。(羽柴)

探訪記

白坪の墓地を巡るの記

時日 三月十日(土曜)午後三時から(臨時)

これは史教会としての表向の予定行事でなく、河野佐福、羽柴の三人が急ぎ思い立つたの實行であつた。

白坪の墓地は都蒸の奥にあり、河野会館が下見をしていたところ、白坪(真)に出かける。古い庵寺の跡らしい一角には六地藏が並んでいる。

矢野、古野と文書のある墓は佐伯(斎)のいかに、はつきりしない。すく横に同姓新級九屋の墓所がある。山吹家の墓である由、佐伯には珍らしい地蔵を空崖印塔を正面に左右にスワリと各種各様の墓塔が並んでいる。「経王(空)塔」とか「大衆(空)葉(空)塔」など珍らしい。少し全つたところ、上野明神の社家橋(佐伯)の墓せしらへる。

三つは安永八年毛利和泉守高嶽(末)の及がけの鳥居のふる天福社の前を経て、祀魂所に参拜、更に中野の墓地に参り、今泉(末)の墓や、主見(末)の墓や、元禄墓の群などを見る。こゝは既に私は数度におつてゐる(佐)と云ふ。

案内外足許に珍らしいものがあるもので、やはり足で掘ることが私共の習性であると思ふ。そしてこゝのように少人数で歩く歩いてゐる(佐)と云ふことか、私共の一行の方で出づればならぬ。(羽柴)

会場の

折じ、和歌(平田(末)氏)はついで本誌に度々取上げてゐる常盤井堤に關する記事に出ている田原親興が、恐らく大坂に旅立つ甲斐鶴守であらう、とり交した和歌で、平田(末)の念の晴りになるもの。元を次のように詠むのであらうと、先日二人で詠んだ。由(正)を乞う。

別れの御歌の返し

出づ 逢と見し難破の甘のふしのまの

ゆめにまさらぬ わかれ方りけり

別路の露の言の葉 身にしみて

いとどかばかぬ あかたもとかた

言の葉におもふこゝろは(つ)きせねと

ちらぬは同じ方ら(つ)方りける